

# 紀 要

第 22 号

2009.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

## 浅井郡内における横穴式石室墳二例 —長浜市孝徳の宮古墳・横江古墳群1号墳—

辻川 哲朗

### 1. はじめに

平成19・20年度、外谷川補助砂防総合流域防災工事に伴い、長浜市醍醐地先において小野寺遺跡の発掘調査が実施され、筆者は調査を担当した。調査では谷の内部において雛壇状に造成されたテラスが多数検出されたが、出土遺物が少なく、その位置づけは平成21年度に刊行を予定している報告書に譲ることにしたい。

調査の実施にあたって周辺を踏査したところ、調査地に隣接して円墳4基からなる古墳群を新規に確認することができた<sup>(1)</sup>。また、調査地内では古墳時代の遺構は未確認であったけれども、わずかながら古墳時代の所産と思われる須恵器片の出土をみており、テラスの造成に伴って古墳が破壊された可能性が想定できた。

そこで、これら古墳群との比較検討を行うために、周辺の古墳の踏査を行ったところ、2基の開口する横穴式石室墳の存在を知ることができた。長浜市竜安寺所在孝徳の宮古墳と、同小野寺所在横江古墳群中の一古墳である。

浅井郡内の古墳、そのなかでも横穴式石室墳については、これまで十分に資料化がなされてきたとはいえないので、この機会に石室の実測調査を実施することにした。本稿はその調査結果の報告である。

### 2. 孝徳の宮古墳 (図1)

#### 2.1 位置

孝徳の宮古墳は長浜市竜安寺地先に所在する。

地勢的にみると、姉川の支流である田川が形成した谷の東側—左岸を画する丘陵部に位置する。田川が形成した谷は標高約180m付近を谷頭とし、谷底に扇状地を形成して、南へむけて緩やかな傾斜をなしながら標高を減じ、標高約120m付近で傾斜をさらに緩め沖積平野へ移行する。この谷には、谷頭の谷口をはじめ北野・竜安寺・力丸・高畑等の集落が点在する。孝徳の宮古墳の位置は竜安寺集落の背面にある小支谷の上流部にあたる。古墳の正確な標高は未計測であるけれども、おおむね標高約180m付近になる。

『平成13年度滋賀県遺跡地図』には「円墳 横穴式石室」と記されている<sup>(2)</sup>。今回、周辺部を踏査したけれども、これ以外に古墳の分布を確認できず、現状では単独墳であると考えられる。

#### 2.2 墳丘

古墳は谷の南側斜面に位置する。墳形は円墳で、墳頂部に祠がある。墳頂部は石室を中心に大きく掘削を受けてい

る。墳丘の直径は約10mを測る。表面観察では列石・葺石・埴輪等の外表施設は確認できなかった。

#### 2.3 石室

**遺存状況** 先述したとおり、石室は北側と南側の天井石が除去され、南北から石室内に入ることができる。

**形態・法量** 現状での石室高さは約1.1mであり、床面の大半は流入土によって埋積している。そのため、床面の平面形状は判然としない。しかし、南側が幅1.3m程度、北側が1m程度であることに加えて、東側壁面のなかほどで若干ながら幅が減る部分があり、それが袖部になる可能性がある。その場合、幅の広狭からみて、南側に奥壁があり、北側に羨道部が続くと考えられるので、北向きに開口する右片袖式の横穴式石室となる。

**壁面構成** 少なくとも東壁は2もしくは3段以上、西壁は3段以上に石積みされる。天井石は2石が遺存している。その下端ラインの高さには特段の差は認められない。

**その他** なお、出土遺物については採集できなかった。

#### 2.4 小 結

以上、孝徳の宮古墳の横穴式石室について述べてきた。残念ながら、決して良好な遺存状態とはいえないために、所属時期についても十分に検討しがたいのが現状である。

### 3. 横江古墳群1号墳 (図2・3)

#### 3.1 横江古墳群について

横江古墳群は長浜市小野寺地先に所在する。『平成13年度滋賀県遺跡地図』には「円墳10数基」という記述がある<sup>(3)</sup>。また、『浅井町内遺跡詳細分布調査報告書』では「円墳6基」と記載されている<sup>(4)</sup>。今回これらの分布を確認するために周辺を踏査した。しかし、現状では今回報告する石室が開口した1基と、その西側の近接した地点にもう1基の存在が想定される以外に、確実な古墳の分布は確認できなかった。

また、従前の分布調査において作成された基本台帳の所在を確認できていないために、今回報告する古墳が以前の分布調査での何号墳に相当するのか不明である。そのため、今回の報告では石室が開口した1基を仮に1号墳、その西側のもう1基を2号墳と呼ぶことにしたい。

#### 3.2 位置

1号墳は小野寺集落の南辺を西流する小河川が形成した谷の南側斜面に立地する。

#### 3.3 墳丘

墳形は円墳であり、直径約10mを測る。表面観察による

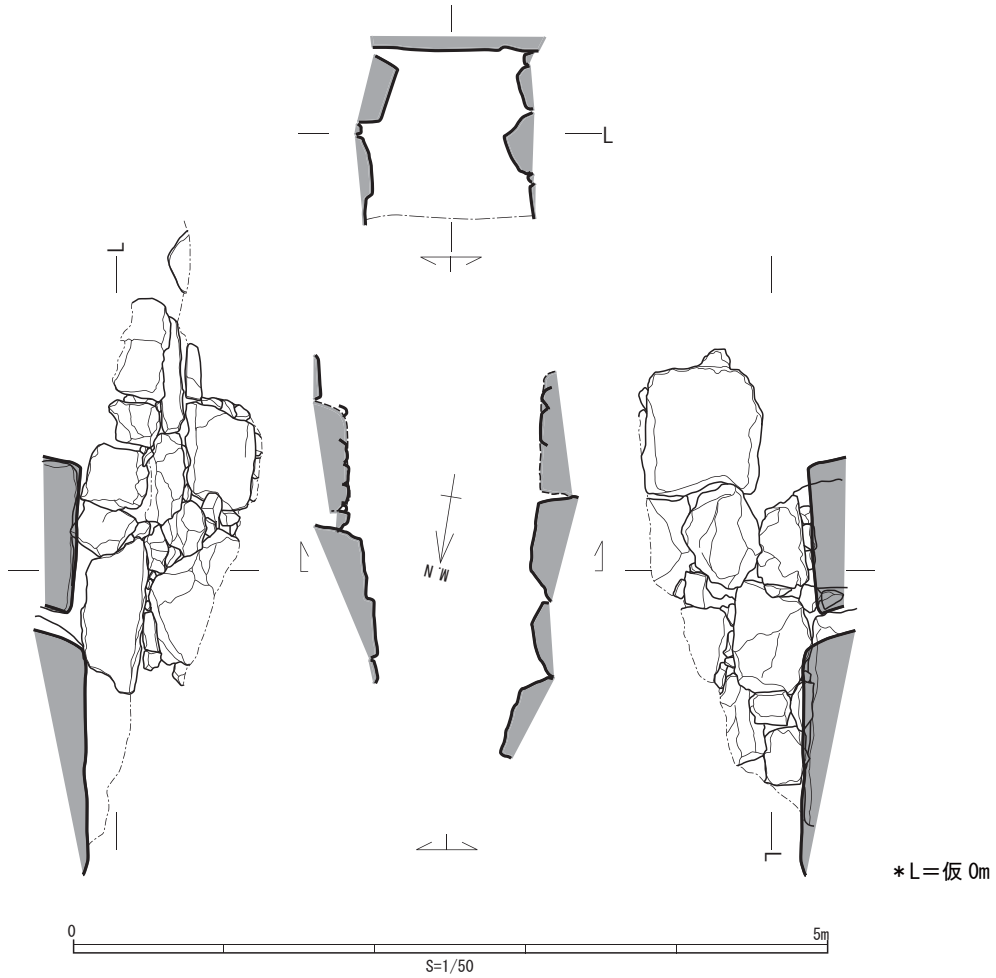
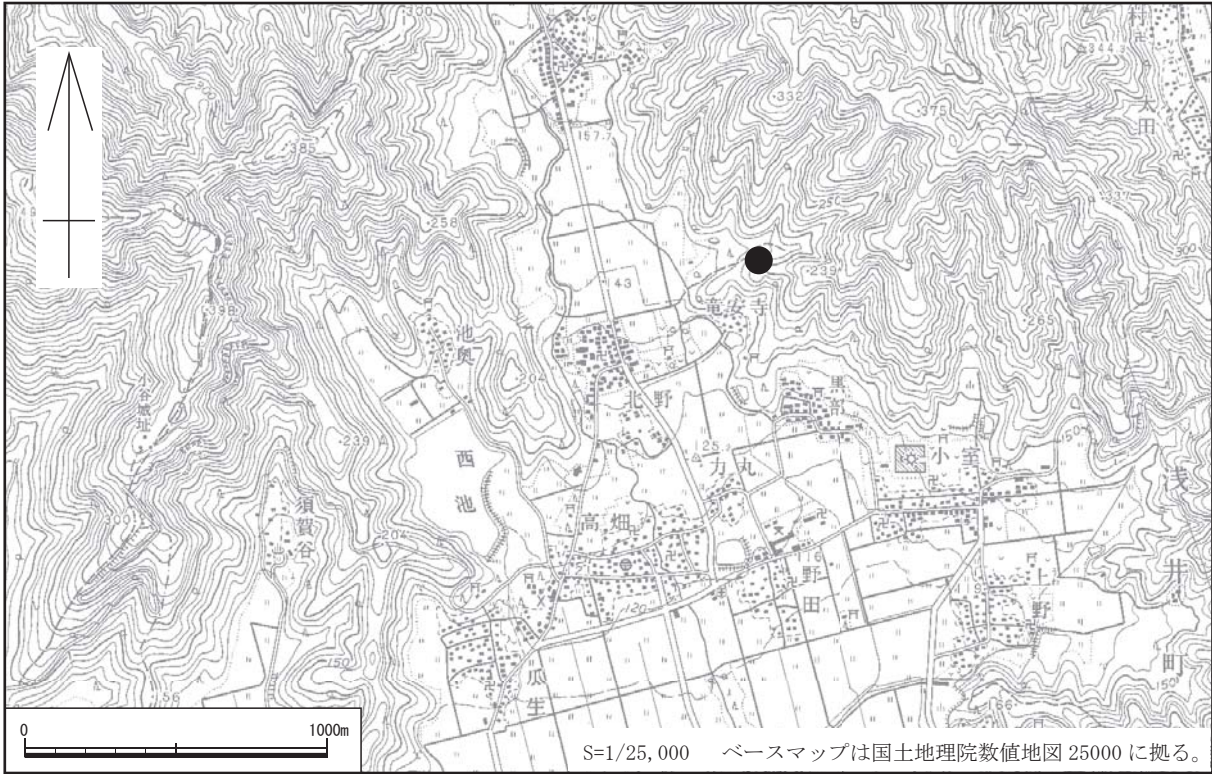


図1 孝徳の宮古墳の位置（上）と石室実測図（下）



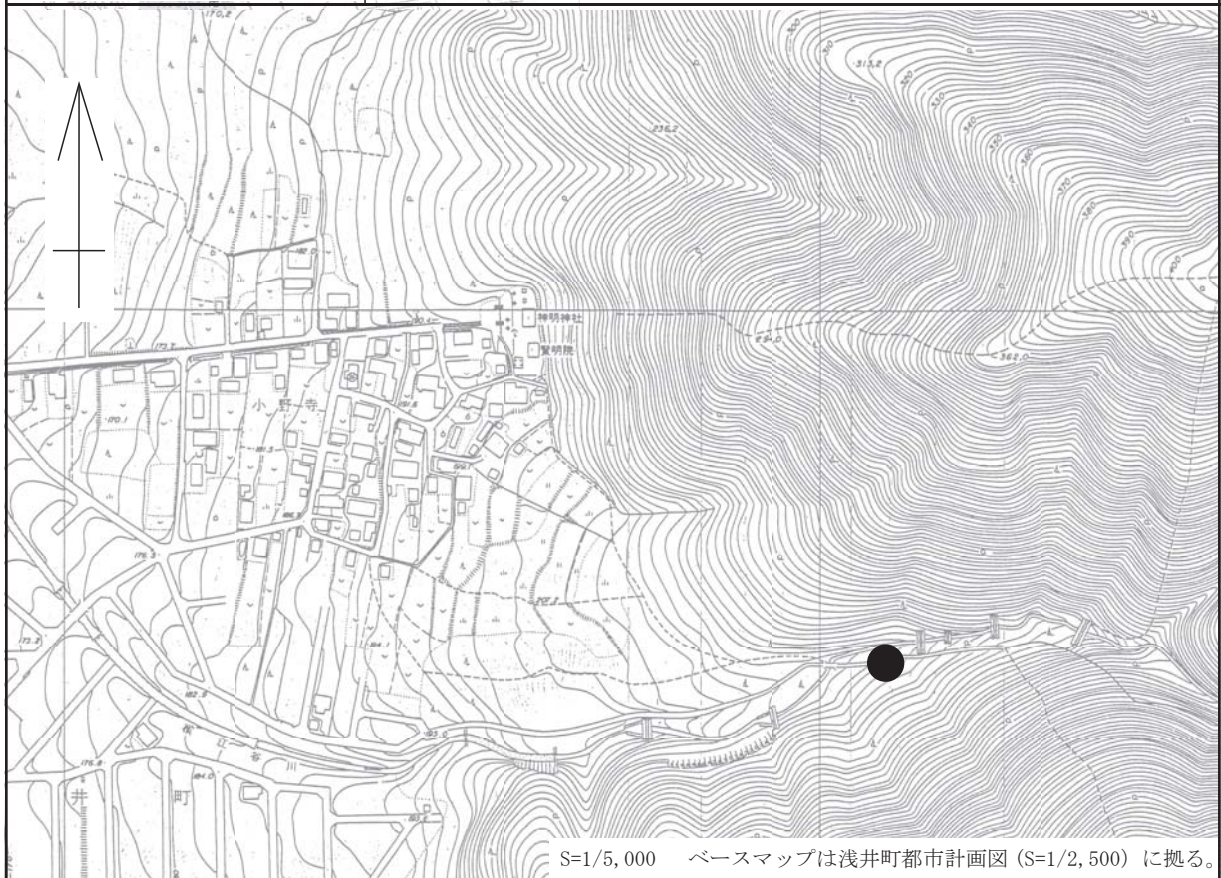
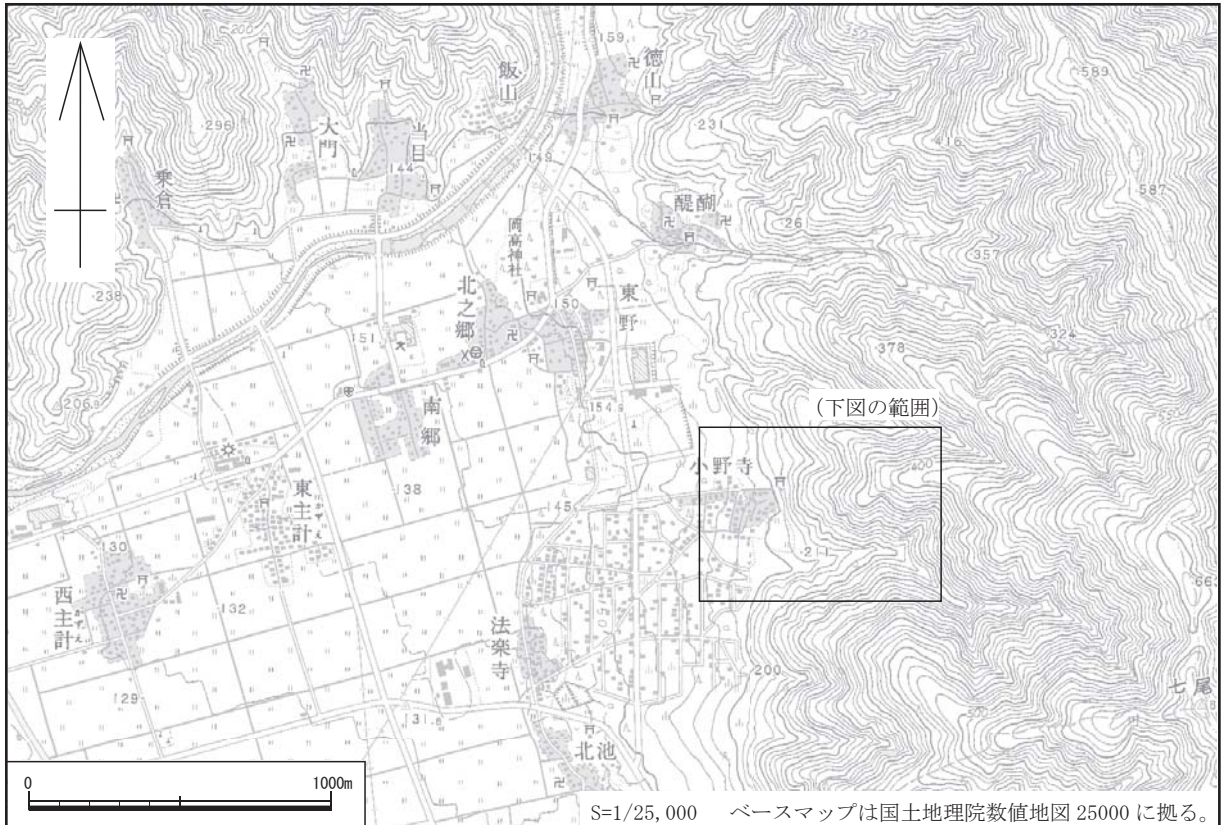


図2 横江古墳群1号墳の位置

かざり列石・葺石・埴輪等の外表施設は確認できなかった。

### 3.4 石室

**遺存状況** 石室は側壁と羨道の一部を除いてほぼ完存する。

**平面形態** 左片袖式の横穴式石室である。主軸をほぼ南北方向(N-4°-W)にとり、北側へ開口する。

**各部法量** 石室各部の法量は石室全長約4.8m、玄室長約2.8m(左側壁)、奥壁幅約2m、玄門幅約1.8m、玄室高約2.1m(奥壁部)・同約1.2m(玄門部)、羨道幅約1m、羨道高約0.8mである。

**玄室** 以下、壁面構成について奥壁・右側壁・左側壁・天井の順に記述する<sup>(5)</sup>。

奥壁は5もしくは6段に積み上げられている。ただし、目地のラインは上下に振れがちである。遺存高からみて、現状での最下段が基底石に相当すると考えられる。基底石には長軸0.8～1m程度の石材をヨコ使いし、それより上部には長軸0.6m前後の石材をヨコ使いで用いる。さらに、それらの間を拳大程度の小石材で充填する。

右側壁は中央部で一部の石材を欠失することや、複数段にわたる石材が認められることから、目地のラインは断続的であるものの、おおむね4段程度の積み上げを想定することができる。奥壁部との関係からみて、現状での最下段は基底石とはみなしがたいので、当初の積み上げは5段程度であったと想定できる。断面形をみると、現状での床面から1.3m程度(奥壁側)をほぼ直立気味に積み上げた後、それより上部は石材を持ち送り気味に据えている。石材は長軸0.5～1m程度を測る例が多く、奥壁に比してやや大ぶりの石材を用いる傾向を看取できる。石材の据え方はヨコ使いが主体であるけれども、一部にタテ使いする例がある。さらに、それらの間を拳大程度の石材で充填している。

左側壁は一部に石材の抜け落ちや土圧による石材のほり出しがみとめられるものの、おおむね完存するといつてよい。目地については右側壁と同様であり、5段程度の積み上げを確認できた。断面形は下半部を直立気味に積み上げ、上半部は石材の面を持ち送り気味に据えている。石材は長軸0.5～1m程度であり、右側壁同様に奥壁よりやや大型の石材を用いる傾向がある。その大半はヨコ使いによって積まれている。それらの間には拳大程度の小石材が認められる。

天井は平天井であり、2石からなる。いずれも主軸方向で1～1.8m程度を測る大型の石材である。

**袖** 袖の張り出しは約0.3m程度であり、決して明瞭とはいえない。長軸1.3mを測る大型の石材をヨコ使いした後、もう一石をヨコ使いで積み上げている。

**羨道** 側壁は長軸0.5～0.7m程度の石材をヨコ使いによって積み上げている。目地は左右側壁ともに2段以上を確認できた。天井石は1石が遺存する。主軸方向で1.5m程度を測る大型の石材である。羨道天井は玄室の天井下端

レベルよりも約0.3m低く架設される。

その他 遺物については採集できなかった。

### 3.4 小 結

以上、横江古墳群1号墳の横穴式石室について述べてきた。玄室の特徴などからみて「畿内系石室」の範疇で捉えうる事例である。所属時期については浅井郡内の石室の様相が不詳な現段階では確定しがたいけれども、側壁の使用石材が比較的大型であることや、袖の突出が顕著でないことなどからみて、6世紀後葉から末頃の所産と考えておきたい。

また、本石室の特徴として特記しておきたいのは石室が北側に開口する点である。横穴式石室の開口方向は南側を指向するのが通有であることからみると、その特異性は否めないであろう。この北側開口指向は孝徳の宮古墳においても指摘できるし、外谷古墳群や塚原古墳群においても看取できることから、当該地域の地域性として評価しうる見通しをもっている。この点については今後検討を深めてみたい。

## 4. おわりに

以上、孝徳の宮古墳・横江古墳群1号墳の横穴式石室について報告を行った。湖北地域の横穴式石室については、伊香郡域の事例に関する資料化と研究が進められているものの、それ以外の地域では十分とはいえない。とくに、浅井郡域には総数約60基以上に及ぶとされる大型群集墳である塚原古墳群をはじめ、数基～10数基程度の後期群集墳の存在が知られており、その実態の把握は当該地域の地域史を考えるうえで重要になってこよう。

今回の調査は浅井郡をはじめとする湖北地域の古墳時代を検討する手はじめてであり、今後継続的に資料化を行ったうえで、総合的な検討作業を試みることを期して本報告を終えることにしたい。

(つじかわ てつろう)

## 註

- (1) この新規発見の古墳群は現時点で名称が決定されていない。そのため、本稿では所在する字名「外谷」に基づき、「外谷古墳群」と仮称しておく。本古墳群においても地形測量調査を実施しており、別稿においてその成果を報告する予定である。
- (2) 滋賀県教育委員会編『平成13年度滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会、2003年
- (3) 註2文献。
- (4) 浅井町教育委員会編『浅井町内遺跡詳細分布調査報告書』浅井町教育委員会、1993年
- (5) 以下の石室記述における玄室左右の側壁の呼び分けは奥壁から羨道方向をみて左右を示している。



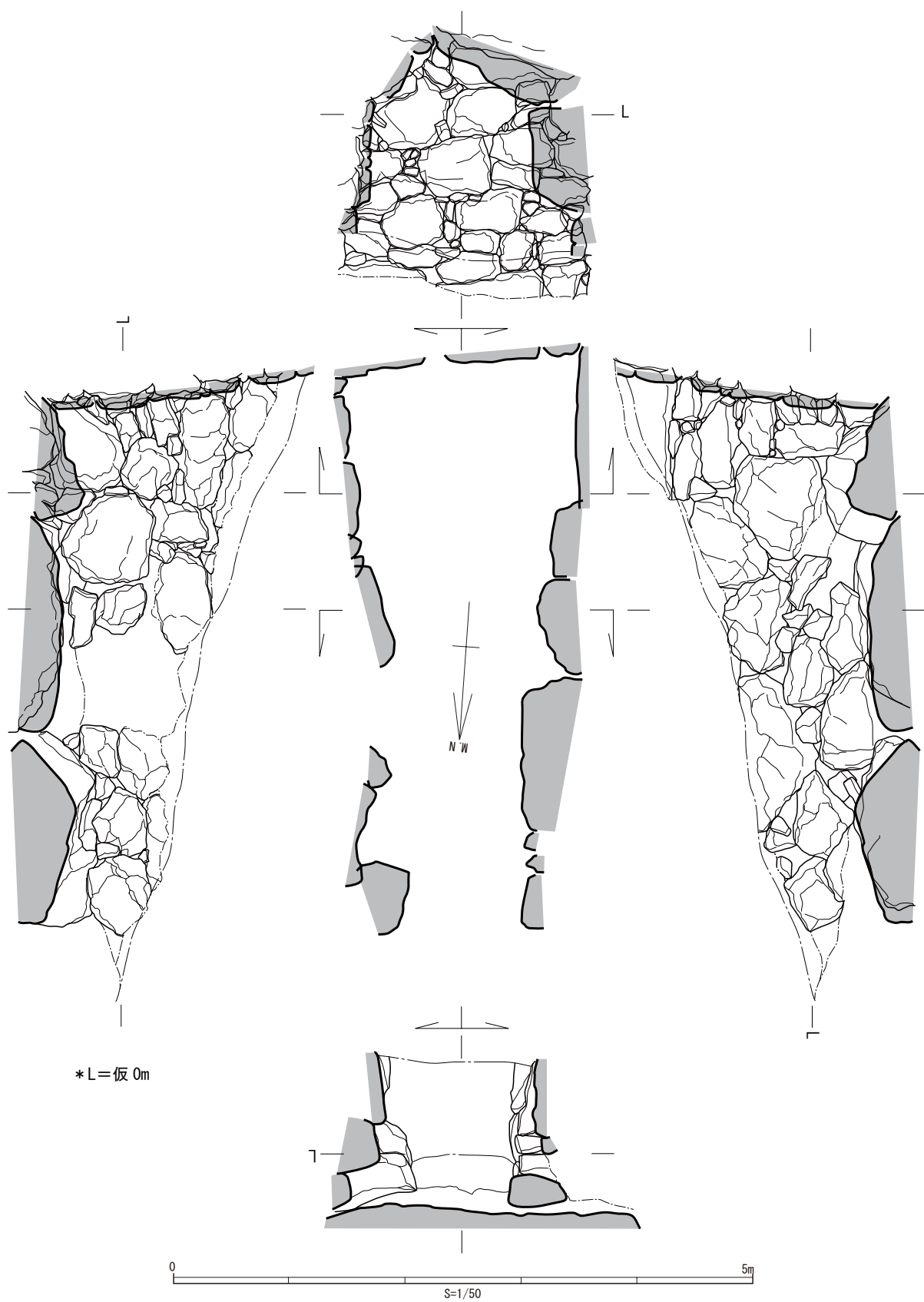


图3 横江古墳群1号墳横穴式石室実測図

#### 編集後記

今回の紀要は、出土資料の紹介をはじめ、遺跡および遺構の新たな評価や再検討など多彩な内容となっています。これらには、近江の独自性が垣間見えるとともに、幅広い交流の歴史が反映されているようです。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っています。

(編集担当)

平成21年(2009年)3月

### 紀 要 第22号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel.077-548-9780(代)  
<http://www.shiga-bunkazai.jp/>  
E-mail: [mail@shiga-bunkazai.jp](mailto:mail@shiga-bunkazai.jp)

印刷・製本 (株)同朋舎